黒百合の花言葉

サークルO.L.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒百合の花言葉

【Ｎコード】
Ｎ９３５８Ｚ

【作者名】
サークルＯ．Ｌ．

【あらすじ】
疾走感が醸し出されるヤンデレ。素早い展開で貴方を翻弄していきます。

一年（前書き）

どうも。
袖が長くて手が出せていない少女が好きです。狂風師です。

いきなりですが、この小説はストックが少ないため、完結までに時間がかかります。
「それでもいい。むしろそれが良い」と自信を持って言える方だけお読みください。

一年

数週間後、私たちは血塗られた。

私は高校二年生。

緑豊かな高校の中庭に、私たちはいた。

友人と一緒に昼ごはんの時間。

この友人とは高校に入ってから知り合った。

物静かで落ち着いた性格の彼女は、いつも一人でいた。

私も同じクラスで、いつもその様子を見ていた。

話しかけたのは五月になってから。私からだ。

教室の隅の方の席だった彼女のところへ、机を運んで話しかけた。

俯いていた彼女は、その綺麗な黒髪を上げて、私を見た。

この時の、まだ何も汚れていない目は、とても美しかった。

それからというもの、毎日毎日、彼女と食べた。

彼女と昼ご飯を食べるためだけに学校に来ていた。そう言ってもいい。

体育でも、その他の活動でも、グループになるようなものは、すべて私がなってあげた。

小さな、恥ずかしがった声でお礼を言われると、嬉しくて仕方がなかった。

私より少し背が低いため、その恥ずかしさを隠すために俯くのも、とても可愛かった。

そうして、私の一学期は終わっていった。

夏休みに入っても、彼女の事が忘れられなかった。

携帯電話で、一日に三時間以上話すこともあった。

彼女の事が好きすぎて、眠れないこともあった。

その度、夜中に家を飛び出して、彼女の家に行くこともあった。

でも、決して中に入ることはなかった。

彼女がいる部屋を覗くだけだった。

夏の気温よりも暑い、私の夏は過ぎ去った。

しかし、彼女の事を忘れたわけではない。

夏の次は、長い秋がやってきた。魔法の秋。

その言葉がよく似合った。

夏休みに会えなかった分だけ、私は渇いていた。

彼岸を過ぎても、私の熱は冷めなかった。

自分の熱を我慢しつつ、一年が終わった。

一年（後書き）

残りストック、ルーズリーフ１枚（６００文字ほど）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9358z/

黒百合の花言葉

2011年12月29日10時56分発行